



# 妙たえの光ひかり

通刊41号 復刊20号

1997年3月10日(季刊)

角田山妙光寺 発行  
新潟県西蒲原郡  
巻町角田浜 〒953  
TEL 0256-77-2025

## 八重桜

境内の春の訪れは椿、梅に始まる。足元には山野草のカタクリ、ヒトリシズカ、そして水仙、枝垂れ桜、カイドウ、染井吉野と花が続く。春の終わりを飾るのがこの八重桜。四月中、下旬が盛りで、これが散ると、サツキ、ツツジ、アジサイと続き、季節はもうじき初夏。

里桜の園芸品種とかで、白、薄紅、濃紅、黄緑と花色があり、その違いを楽しむことも境内でできる。

満開の頃には山門にいたる参道の両側、八重桜のトンネルが参拝者の目を楽しませ、毎年四月二十八日、その下を「ご判さま」の行列が通る。この光景を想い描いて、昭和五十年の現住職の入寺記念に、小林與志英さん（巻町）が苗木を植えられたもの。

墓地周辺には五十本が、十年前に河村信雄さん（巻町松山）の手で植えられ、成長が待たれている。潮風に強い木で、数をもう少し増やすことも計画中。

# お彼岸を迎えて

小川英爾

暖冬で積もるような雪と、凍みるような寒さもほとんどなかった今年の冬でした。こんな年は「春ぎつたない（春汚い）」と言って、春先に寒波がきたり、天気が悪かったりしてなかなか春らしくならないのだそうです。暖かくやわらかい日差しが恋しいのですが、そう思っているうちに、暑さ寒さの境目といわれるお彼岸がやってきます。

彼岸の「彼」とは「遠くにある物や人を指す」と辞書にあります。彼岸ですから、遠くにある岸、むこう側の岸ということになります。むこう側の岸があれば、当然こちら側の岸もあって、これを此岸（しがん）といいます。仏教では、彼岸（むこう岸）を迷いや悩みのない悟りの世界、反対に此岸（こちら側の岸）を煩惱と欲望の世界と教えています。彼岸は昔のインドの言葉で「パーラミター」（波羅密・はらみつ）を、中国語の「彼岸に至る」と訳したものです。すなわちむこう岸の悟りの世界、仏さまの世界に至ることを意味します。そのためだけに、方法を説いているのがお彼岸の教えというわけです。

この時期、日本中でお墓参りの光景がみられます。妙光寺でも、多くの方がお墓参りに来られるようになりました。実は以前はもつとずつと少なかったのです。お彼岸参りを欠かさない幾人かのお年寄りが「近頃お彼岸の墓参りの人が増えたよな」と、言っておられます。

あるときこの方達とお茶飲み話で、なぜだろうとなりました。その結論は「信仰心や先祖への思いが格別強くなったとは考えにくい。むしろ、雪が降らなくなってお彼岸の時期が暖かくなった。昔に比べて全体が裕福になって、気持ちにゆとりができた。皆が車を持つようになって気軽に来れる。境内がきれいになって、来れば気持ちがいい。何よりもテレビの影響で、お彼岸には墓参りするんだという都会の風潮が広まったせいだ」となりました。中の男性の一人が「お彼岸に墓参りが増えたのはいいが、墓だけ参ってお寺の本堂に参らない人が多いのは困る」と。（本当に住職の発言ではありませんので念のため）

そう言われてみれば、仏具屋のカタログの中に『お墓参りの方へ。お墓参りには、まず本堂のご本尊様に参拝をしてから、自分の家のご先祖様のお墓にお参りしましょう。住職』という、境内に建てる表示板なる商品がありました。実際に県外の大きなお寺の墓地で見たことがあり、何かへんだなと思ったものです。表示板一枚で人の気持ちや行動が変わると思えないので、妙光寺では立てるつもりはありません。

一般に仏事というと、先祖供養、故人への供養と考えられ、お寺はそれをお勤めする所とされています。ある宗派が十年前に都市の檀家千二百人にアンケートをしたら、「お寺を訪ねる理由」の一番が、葬式、法事のお願ひ七五%、仏教の教えを説いてもらう十%。「最も大切なもの」は、寺の本尊十九%で、一番は墓の四四%。なれば、宗門の本尊を知っているが一八%で、知らない七六%、という数字が出ました。なるほど墓参りはしても、本堂には参らないのもむりからぬことです。

お寺の側が考えていることと、世間一般の人たちが思っていることの間には、大きな開きがあるようです。その背景にはいろんなことがあります。このことに悩んで活動している僧侶もいれば、悩まずに建て前と本音として使い分けている僧侶もいます。僧侶の側の問題があります。また歴史的な寺の在り方、寺の経済の問題、日本人の宗教意識全般の問題等々、長い間かかって起きてきた問題だけに簡単にはいきません。でも宗教を求める人がいる以上、本来の仏教のありかたを伝え、寺のありかたを考えていかねばならないと思っています。さきほどのアンケートで、「僧侶への期待」という問いに、仏教の教えを説く三一%とあつて一番でした。二番はなにも期待しない二九%でした。

話をお彼岸に戻しましょう。お彼岸||お墓参りという考えのもとには、お彼岸という言葉が、死後の世界と理解されていることからかもしれません。お墓参りは仏教修行の一つです。煩惱のない悟りの世界を、死後ではなく現在のこの世に、自分の修行によって見つけよう。そのために日の長さも陽気もかたよらないこの時期、六つ（施し、戒めを守る、耐え忍ぶ、努力、心落ち着け集中する、かたよらず正しい判断）の教えを集中して修養する期間が、お彼岸の一週間です。とかく忙しい毎日、改めて考えてみてください。

お彼岸は日本だけの習慣だそうです。個人的には、仏教の教えを形にした行事で、故人を偲ぶという日本人の感覚からも入りやすく、親しみやすいものとして、これを考えた先人の知恵に敬服しています。

（開山堂出版『お彼岸と花祭り』から一部引用しました）

一 番 小 さ な 講 中

升 瀉 講 中

妙光寺の檀家で構成する各地区の講中で、現在定期的に活動しているのが六地区ある。その中でもっとも少人数なのが、この升瀉講中。西川町升瀉という集落に檀家が七軒。その全員が参加している。

集まりは毎月一回、各家を順番に会場として持ち回る。夕食後に集合してお経を上げた後、漬物、お汁粉など会場主心づくしの品が並び、お茶を飲みながらの談笑が続く。気が着くと十二時を回っていた、などということもあって、集まりはいつも土曜日になっている。

人数が少ない分まとまりがよく、体の具合でも悪くないかぎり、皆楽しみにしていつも全員が揃う。また曾根駅

からお寺へのバスの便がなくなっただけで、行事へのお参りがとても不便になった。以来都合がつくと渡辺さんが、ワゴン車を出して女性陣を乗せてくれたり助かっている。

夏の暑い盛りで大変な墓地の草取り作業を、長年請け負ってくれたのもこの地区の人たちだった。いまでは皆が高齢化して、大きな蛇がいたとか、蜂に刺されたとか、思い出話になってしまった。

こうした中心にいるのが高橋強さんで、この高橋さんが講を言い出し、もう五十年以上続いているとのこと。毎月の集まりも、高橋さんが導師（法要の中心）になってお経をあげていたの、住職が顔を出すのは年に一度くら

いだった。二年ほど前から八十歳近くになった高橋さんが体調を崩し、毎月住職か鎌田が出向くようになった。一時は心配された高橋さんの具合も回復し、参加もできるまでになっている。

その昔はお寺に自動車もなく、夜は住職も出なかった。各地区で今以上に盛んだった講の集まりは、地区ごとになっていた中心人物が取り仕切っていたという。こう

した運営ができたくなつたのは寂しい気もするが、都会のお寺では講中そのものもなくなくなって聞いている。



## 年の暮れのにぎわい

昨年末の大晦日、雪も風もまったくなくとても穏やかな夜になりました。このせいで除夜の鐘に文字通り、老若男女二百五十人（推定）が集まり、用意した抽選も景品もコンニャクも、あつという間になくなってしまいました。

暖かいせいで、本堂にゆっくりお参りする人、お焚きあげの火を囲んでスルメを焼く人、鐘の順番をじっと待つ人。思い思いに過ごして新年を境内で迎えました。

この日も駐車場が一杯になり車が道路にあふれましたので、このたび整理をして一部広くしました。

先号でお知らせしたように修行研修中の鎌田が、昨年十一月一日から今年

二月十日まで、百日間の荒行堂での修行を無事終えて戻りました。成満の日の二月十日朝六時半、迎えの両親と住職、それにぜひ迎えたいと巻町の小林與志英さんが駆けつけてくださり、遠寿院の行堂を出てきた本人をねぎらいました。

この期間住職が一人で、昨年暮れのお経回りが年内に済まず、一部地域の方にはご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げご協力に感謝いたします。

本堂立替えの話はどうなった？と、ご心配の声をよくお聞きします。現在の客殿を設計された茶谷正洋先生（法政大学教授、東京工業大学名誉教授）に依頼していた基本設計と、

概算費用がようやくでき上がりました。とてもユニークで、それで暖か味のある本堂です。現在の客殿とのバランスも申し分ありません。

三月中旬に予定している妙光寺の役員会（総代世話人会議）で鋭意協議検討して、早目に皆さんにご報告します。なるべく実現の方向に持って行きたいと望んでいます。とても大きな金額で、不況の続く昨今、皆さんに多大な負担をお願いすることをとっても心苦しく感じています。

月々の自動引き落としによる積み立て等、方策についても十分検討します。



# 大荒堂一百日

鎌田 義明

十一月一日、千葉県市川市にある正中山遠寿院大荒行堂で、本年は修行僧八名が苦修練行に身を投じました。娑場世界と修行道場を聖別する瑞門をくぐると、二月十日の成満まで出ることはできません。そこでは命がけで「法華経」の力を全身に浴び、自身の靈性を限界まで高め、秘伝の祈祷修法の相伝を授かります。

荒行堂は、正式には「加行所」とい、日蓮宗ではここでの修行なくして、信徒に祈祷修法を執行することが許されていません。

午前二時半起床、三時が最初の水行開始です。外はまだ闇、全身を貫くような冷水を、「水行肝文」を唱えて肩からかぶりまです。その後水行は一日中六時、九時、十二時、十五時、十八時、

二三時と続きます。この間は読経三昧にあけられます。食事は朝夕二回、極薄のお粥と味噌汁に漬物程度。睡魔、空腹、寒さ、足の痛みが一度に修行僧を襲ってきます。

「コラッ、ボヤボヤするな、もっと声を出せ!」と、先輩僧の容赦ない叱責が飛んで来ます。ここでは年齢、学歴などの世俗的な関係は一切無視。行の回数を重ねた者、つまり初行は再行に、再行は参行に絶対服従の上下関係で成立します。緊張で張りつめている初行僧は、「荒行ボケ」で今日が一体いつなのかもわからなくなります。

荒行僧が読経三昧に終始する読経堂は、伝統四百年、荒行堂発祥の昔から本化秘法の奥蔵として、無限の古韻が漂っています。壇上に高く奉安する

『祈祷本尊鬼形鬼子母尊神』は、元禄年間に京都の名仏師「如水」が、一三札丹精込めた謹作。身の丈六尺、鬼形の偉容は朝に夕に仰ぎ見る私たち修行僧の、膽をえぐり心魂を凍らせるものがあります。

その左右に掲げられた「完水白粥凡骨将死」「理懺事悔聖胎自生」の喝文のとおり、寒水に肌をさらして一日中荒こもの上に端座しての読経三昧。一百日間、懺悔の祈りだからこそ成し遂げられたと、今思い返しています。



別紙ご案内のように中国への団体旅行を計画しました。昨年十二月に住職が、関東地区の他のご住職と交通公社に招待されて行きました。お寺の団体旅行を増やそうというのが招待の目的だったのですが、妙光寺では難しいと伝えていました。

ところが、身延山旅行のはんばぎぬぎ（旅行の慰勞会）の席上で、この話をし

ましたら思いがけず幾人かの人たちから、ぜひ計画して欲しいとの声が出ました。当初是北京、西安四泊五日で十三万円という案でしたが、希望者のご意見でせっかく行くのならば、今回の計画になりました。

上海の町は今すごい活気です。蘇州は郷愁を感じる方も多いでしょう。舟

に乗っての観光です。桂林はご存じのとおり水墨画の世界の風景。西安はシルクロード起点の街。三蔵法師ゆかりの寺、楊貴妃の遊んだ庭、ものすごい出土品の兵馬傭遺跡。そして『法華經』が漢訳された草堂寺への参拝があ

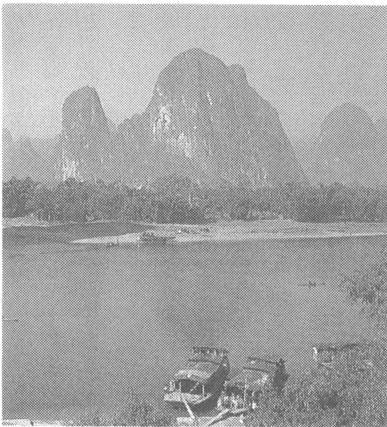
ります。

住職の中国旅行は十六人の参加者に八人の添乗員と、「JTB中国旅行」の担当課長が同行する力の入れようでした。今回の妙光寺の計画はこの課長が直接に手配して、種々配慮がされています。また費用も割引されています。旅行内容の検討に時間がかかり、募

## 中国旅行へのお誘い

集期間が短くなつてしまいました。二十人を割り込むと実施が難しくなります。皆様のご参加をお待ちします。尚、パスポートの取得は全面的にお手伝いします。

また勝手ながら、秋に予定していた九州への団体旅行を延期にしますので、ご了承ください。



(7) 妙光寺教報

## 妙光寺史話

# 〈角田山御歴代控〉より (八)

## 五. 御妙判 (御判)

「御妙判」とは

妙光発行の「宗祖日蓮聖人七百遠忌記念誌」(昭和五六)に由来が次のように記されている。

「文永十一年三月十二日、大聖人の罪が赦されて鎌倉へお帰りになられるとき、警護の役人、遠藤左衛門尉藤原正遠は八一歳、老衰のため明日をも知れぬ命であった。そのため、日蓮聖人と一緒に鎌倉へ帰ることができず、嘆かれたので、日蓮聖人が靈山浄土で再会しましょうと、約束の印を枕辺で刻まれ、お手紙と一緒に授与された。これに因んで法華経

を信仰する者、葬儀に際して必ず、この写しにご判を押して持つていく習わしになっている。」

ご妙判は今から約三八〇年前の延宝三年と、二四〇年前の享保一七年、一四〇年前の文政一二年に当時の江戸城本丸において出開帳し、堂上方の御上覧に供したという記録がある。

妙光寺御歴代控には

(1) 宝暦十三年(一七六三) 日慶上人の時代「二月十九日より御開帳に御出、高山に三日、大島に四日、沼垂に三月の四日、大洲に六日」とある。

・ここでは御妙判か御宝物か、何れ

の御開帳かはつきりしない。

・宝暦六年に寺を焼失して七年後のことである。当時、庫裡が再建されていたとはいえ、前年十一月に本堂再建のための手斧立てをした直後であったことを考えると、その資金集めに苦労されたことが推測される。

(2) 文化六年(一八〇九) 日研上人の時代「五月庫裡建立、廊下建て直し。この勸金、檀家より六拾両、日研上人より式拾両、御妙判五拾両、都合百三拾両」とある。

・御妙判五拾両は高額であるが、御開帳によるものか、それまでの御妙判による積立金によるものかはつきりしない。

(3) 文政六年(一八二二) 日泰上人時代「四月二日開帳に西国へお登り、備後、備中、京都は大当たりと申す事、千ヶ寺より承り候共、この開帳は寺のために壹銭にも相成らず候」

・御妙判か御宝物か、はつきりしないが多分御妙判と思われる。



・大当たりといいながら、利益はなかったと記されている。上方まで往復する経費や滞在費で消え、当初予定した成果が上がらなかったのであろう。

(4) 日泰上人の時代の文政十一年(一八二八) 寺社奉行にあてた「乍恐書付を以て開帳につき奉願上候」という文書がある。これによると、開帳するものは「日蓮大菩薩の御尊像と宝物」とある。場所は浅草本覚寺、期間は二月十六日から六十日間。この内容の立て札を建てたいという願い書である。

建てる場所に両国橋、千住大橋、江戸橋、永代橋等の十三カ所が記されている。日泰上人が寺院の整備に意を用いられたことが察せられる。

ご判様(御妙判)開帳大会・だいえ  
妙光寺の行事で近郷近在に有名となつている「ご判さま」は、毎年四

月二七、二八日に実施されて来た。この行事がいつ頃から定着したかはつきりしない。

(1) 三五代日寿上人が享和二年(一八〇二)に書かれた『年中行事』によると、「三月二八日、宝物開帳。早朝五カ浜村より宝印が御入りになる時、御迎えに出ること。また宵と朝に御膳をお供えすること」とある。

・この日檀家の法事を行なった記載もあって、当時からこの行事が大きなものだったのかはつきりしない。

(2) 明治二十一年四月十五日、新潟新聞に「御宝印開帳」の広告が掲載されている。

(3) 昭和七年五月二日、新潟毎日新聞には「四月二七日は日曜とあつてひどい混雑ぶりであつた。新潟から赤塚、



松野尾へ臨時自動車(バス)が続き、巻や曾根からもバスが続き、清浄な山麓の別天地にガソリンが匂うほどだった。二八日も晴天に恵まれ、前日同様賑やかだった」とある。

(4) 昨年からのこの行事は二八日の一日だけ開催することになった。遠方から信心深い方々の参詣が多いのは、昔も今も変わっていない。

(石田誠太郎)

# ムササビの飼育日記

新潟西高校教諭 藤田久

ムササビを自分で育ててみたいとかねがね思っていた。たまたま家の中に飛び込んできた成獣をもらい受けて飼ったことが二、三度ある。木の箱に入れておいてみたものの、かんじんの餌を食べてくれず、とうとう死なせてしまい飼育は失敗ばかりだった。

ふだん、境内ではマツやサクラ、スギなどの木の葉を食べており、特にカキやナシなどの果実は大好物。だから取りあえずリンゴやスギの葉を与え、うまく食べてくれれば、しばらくは生きていてくれるのだが、当然のことながらせまい箱の中ではストレスがたまり、木のゲージなら齧って外へ逃げようと慣れるどころか歯をむき出してく

る有様だ。  
考えてみれば、もともと野生動物なのだからベツトなどになろうはずがない。したがって食べ慣れていないもの

は受けつけず、やはり野生動物を飼育しようとしても容易なことではないのである。

## 幼獣の捕獲

ひざ上に抱かれて遊ぶ幼獣が紹介された記事を目にしたことはないだろうか。タレントの、あおい輝彦も南アルプスの山小屋で幼獣を飼っていた。こんなに慣れるくらいなら一度幼獣を飼育して、できればすぐ手前で写真をアップに撮ってみたいと手前勝手な思いをめぐらせていた。

アンテナを張っておくと、この思いは風の便りで広がり、とうとう幼獣を捕獲してほしいという連絡が和島村の方から届いた。四月末のことだった。さっそく現地に出向き、屋根裏をのぞいてみると、隅の方にスギの樹皮からなる、直径一メートルほどの巢材の

かたまりを見つけた。この位置は、穴が開いていないか家屋の外回りを事前に調べ検討をつけておいた庇(ひさし)の部分である。天井板を踏み抜かないように近づいてみると、依頼人の言ったとおり幼獣が眠っていた。まだ目は開かず時折、クークーと鳴き、手のひらに入るほどの大きさで温もりが伝わってきた。

持ち出すとき、母親がどこか暗闇から不安なまなざしでうかがっていないか後ろ髪が引かれる思いだった。しかし、「小さいのが産まれると屋根裏で騒ぐからなんとかしてほしい」という依頼人の言葉と、あの「あおい輝彦のシーン」が、この略奪を割り切らせてしまった。

## 育児に奮闘

実は幼獣の飼育はこれが初めてではなかった。これまでの失敗は保温だと考えていたので「ほっカイロ」を入れてタオルでくるんで帰り、さっそく育児の世話が始まった。育児のポイントは、授乳と排便と保温である。ミルクはイヌネコ用の粉ミルクを使い、ぬるま湯に溶いてプラスチックスポイトで授乳させた。排便は親がいれば下腹部をなめて促すようなので、腹部をそつ

とさすつてやると、おしつこの水滴やウンチのボールがボロボロと出てくるではないか。ティッシュでぬぐい、ぬれナプキンで清潔にしてやりながら、ついつい我が子のおしめ換えを思い出してしまふ。

保温は、時期的にしまいかけたこたつを出し夜間は箱ごと入れてやり、今までの失敗が生かされ功を奏した。大変なのは産まれたときから特に爪が長く、手足をばたつかせると抱いている手の肌が傷だらけになって、痛い、を連発しての授乳になる。だから、ムササビはいつもタオルでぐるぐる巻にされて抱かれていた。

日数が経つにつれ腹をすかせるのか、ミルク入りスポイトを両手でかかえむさぼるように吸い付く。勢い余って鼻からミルクを吹き出し、むせて、こちらをあわてさせることがよくあった。このような仕事を毎日かかえて忙しくなったが、妻も珍客が可愛らしくなったようて熱心に世話をしてくれて助かった。

### 飛び立ち

肩の上から滑空するようになるのはいつ頃になるのか興味深かった。試みに肩と同じ高さ上げてやると、ある

日、そこから背中へジャンプした。そのときは息子が初めてハイハイからタツチができたときと似た感動だった。そのうち肩から床にふわつとジャンプするようになり、一瞬、四つ足を広げていた。まだ飛膜は発達していないが、おそらく枝から枝に移るジャンプと親の滑空を学習して滑空行動を身につけるのだと思う。何度も試みたのだが、力強くジャンプをする日が突然やってくる。これは筋肉の発達があったからこそできるもので、飛び出す勢いの差が歴然としていた。つまり発達段階にふさわしい学習や訓練をすべきで、焦らず育てるといふ育児の鉄則は人間と同じである。

### 予期せぬ別れ

こうして活発に動き回り、カーテンにも昇れるようになった。途中で爪がひっかかって生地糸がほぐれ、また敷居の角を齧るようになり洋風建築の我が家は柱もなく、この辺が飼育の限界だと感じてきた。

そこで早く森に帰してやろうと庭の木で滑空練習に取りかかり、幹に乗付けてみたところ枝から地面に降りるやいなや、部屋の中へ駆け戻ってくる有様にはびっくりした。



ある真夜中のこと、仕事の最中、足をばさばさと動くので、しばらく庭の木で遊ばせておいた。そのうちいつものように戻って来ると思っていたのに思いもよらず行方不明になり、妻には叱られるばかり。懐中電灯で探したのだが、周囲に林もなくネコかなんかにおそわれたのか解らずにしま。二カ月前の子育ては、こうしてあつけない終わってしまふ責任が果たせなかつた。次号からは寺を取り巻くみどりをテーマにとりあげます。

## 三基目の動き、他

「安穩廟」三基目の予約申し込みが二月末現在で、二七件になっています。三基目の建設工事が三月着工の予定でしたが、この四月から墓地建設の許可事務が行政改革で、県から市町村に移管されることになり、その狭間にかかって許可のおりるのが四月中旬になりそうで、そのぶん遅れます。お盆前に納骨を予定されている方には、その区画だけ先に完成させる等の方策を検討しています。

三基目の建設にあわせて「安穩廟」の案内パンフレットを作り替えています。最近では会員の方から聞いたという、口コミによる申し込みが増えていることもあり、皆さんにもでき

しだい一部ずつお送りします。さらに欲しいという場合はお知らせください。三月中には出来上がる予定です。

今年の「フェスティバル安穩」は新藤兼人監督を迎えて、充実した集まりになりました。この模様を監督の事務所である近代映画協会が撮影していました。同席していたNHKと近代映画協会の担当プロデューサーも内容に感激、NHKで放映する企画を温めていますが実現には至ってません。

その前に、新藤監督ご自身の生き方を題材にした番組が作られ、その中の一部昨年のフェスティバルの模様が紹介されることになりました。放送はNHK衛生第2放送三月十四日(金)夜

八時～十時半「大老人」です。今年のフェスティバルの内容は未定ですが、八月二三、四日を予定しています。

大分市で「安穩廟」を作る計画が行っていますが、これに関連して樋口恵子さんを迎えて講演会とシンポジウムを開きます。場所は大分市ですのでお間違えのないように、前号で誤解されやすい表現をしましたこと、お詫びします。



「春をむかえて」



正月が終わると、二月の少し春めいてくる頃まで、寺の生活も一番暇で静かな時期を迎える。冬になつたらじつくりと写真の整理や時間のかかる事をしようと思待ちにしているのだけれど、そうすると、風邪をひいたり寒くてやる気が起こらなかつたりで、とうとうグータラして終わってしまった。

暇になると何もしていなくても考えることだけはあつて、つらつらと思いをめぐらせ、そうしているうちに疲れでしまって、いらいらしくなる。

いらいらしくすると自然、夫婦けんかにならぬと自然、よけいに頭にくる。けんかに使うエネルギーを写真の整理に使えば良かったと後悔する。

かつと怒つたり、いらいらすると細

胞がどんどん壊れるのだそう。そんな感じが実感としてわかるような気がして、反省してばかりいた。

私がグータラと過ごしてしまつた冬、弟子の鎌田はとても有意義な時間を送っていた様子が、彼の表情からみて想像された。のびた髪の毛と髪の手間から一つの事をやりとげた自信と喜びがあふれている。

そのことは、主婦歴十三年、自分の道をきわめるといふことも、なりたいた職業に向かつて夢を追うことも忘れてしまつた私に、昔を思い出させてくれた。

若い頃は誰だつてこんな時期があつたはず。たいへんなことも、辛いことも、自分の将来のためなら乗り越えら

れた。今、そういう事には無縁になつてしまつた生活が少しさびしい。

子どもを育て、夫を支えることも、大切だ、などと言うつもりは無いが、お金を稼げない悔しさはあるけれど、卑屈にはなつていないし、楽しみもある。でも人が自分の夢や仕事に邁進しているのを見ると、うらやましいと思つてしまう。何故だろうか？

春は多くの人たちが新しい生活を始める事だろう。あの山の向こうにはなにかがあるのだろうという期待、こんな風だつたらなという希望、夢は大きな原動力になる。

勢いで主婦になつてしまつた私は隣の芝生を時々羨みながら、主婦ならではの生きる道を模索中。ごろごろしながら、今日の献立から世界平和までも考えながら、自分の夢をまづ見つけることが一番の課題…かな。

(小川なぎさ)

# 行事案内

三月二十日(木)

春のお彼岸中日法要 並びに

荒行堂帰山報告式

10時 安穩廟法要

10時半 荒行堂帰山奉告式

11時 春季彼岸会中日法要

12時 お斎(とき)

1時 説教

荒行堂から戻った鎌田の、帰山奉告式をこの日行ないます。本堂前で水行によって心身を清めてから、奉告式に臨み、最後に参列者にお加持をいたします。大々的にこの式を行なう所もありますが、今回は内々の形となります。気楽にご参列ください。このため安穩廟法要の時刻が繰り上がっています。いつもより少し早目にお出かけください。

お斎(とき)はどなたでも着いていただけます。広間に受付帳場がありますので、お申込ください。

お彼岸から、岩屋七面様のほり旗と、本堂前お題目のほり旗を立てます。奉納いただいた方々、お礼申し上げます。

四月二十八日(月)

ご妙判ご開帳(ご判さま)

日程は別紙ご案内します。お誘い合わせ参拝ください。

事前に志納金袋、施餓鬼法要の塔婆と、祈願の申込書を配布します。ご協力お願いします。

今年の年番は曾根、升潟組です。また角田地区の方々には幟立て、輿担ぎ、それぞれに宜しく願います。

法要に出仕する稚児が十名定員のところ、女兒に若干名の空きがあります。檀家に限りませんので、遠慮なくお申込ください。小学校入学前くらいのお子さんが適当です。

あ・と・が・き



昨年暮れの十二月二十日、老人保健施設に入所中の八七歳になる母が、肺炎を起こして病院に入院。痴呆があるため二四時間家族の付き添いが必要と言われ、正月を前にあわてました。

兄弟に家政婦さんを加えて交代の付き添いで何とか乗りきり、正月過ぎに無事に退院させました。私の上に一兄三姉いますが、皆があてにできるものではないことを実感しました。

また私も二晩泊まり、同室の痴呆老人とその家族の大変さも痛感、あらためて家族介護の困難さと、福祉行政の遅れを考えさせられました。今は元気になった母ですが、いつまた入院するかわからず、その時を思うと不安です。私たち家族はみな元気、先日の人間ドックでは運動不足と成人病の可能性を言われましたが。

(小川)